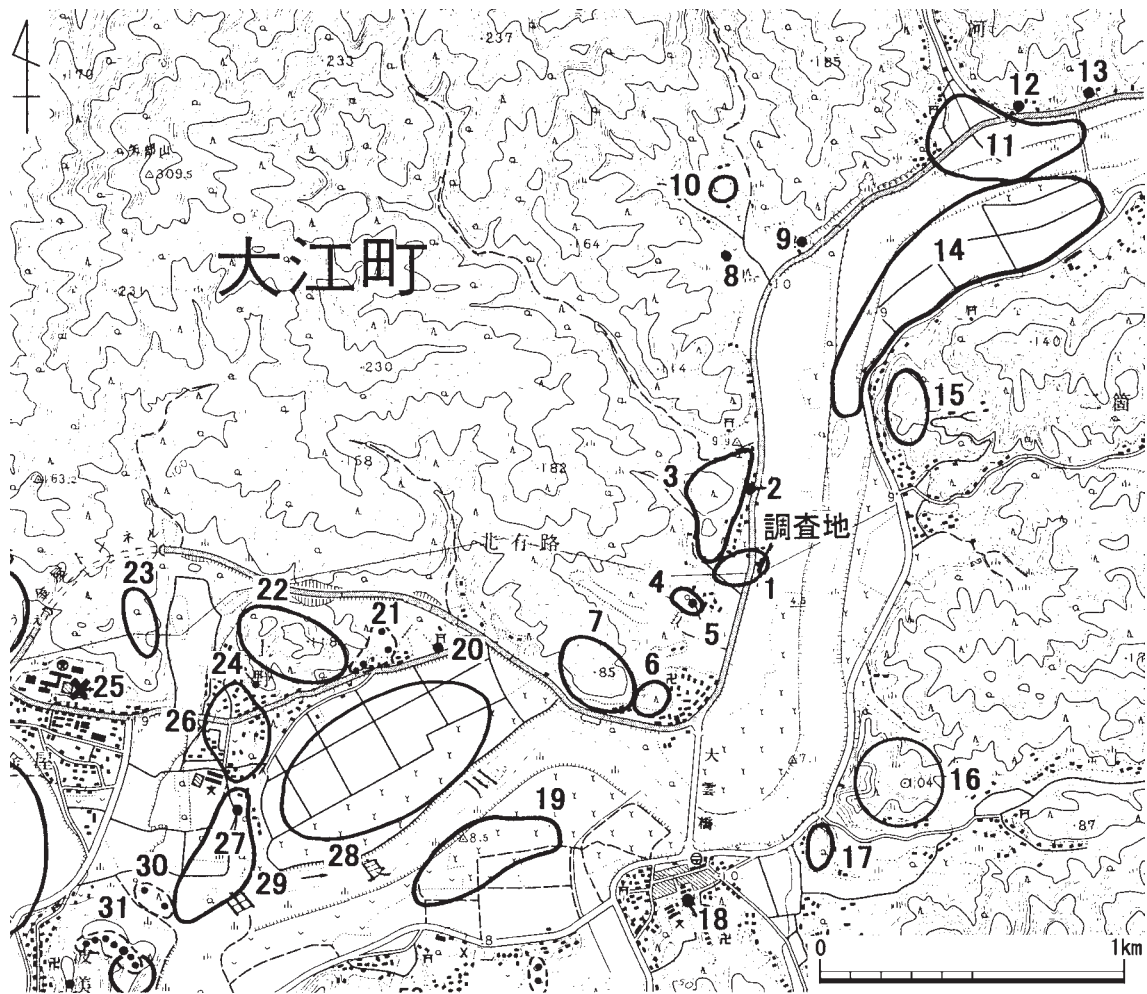


1. 仲ノ段遺跡第2・3次発掘調査報告

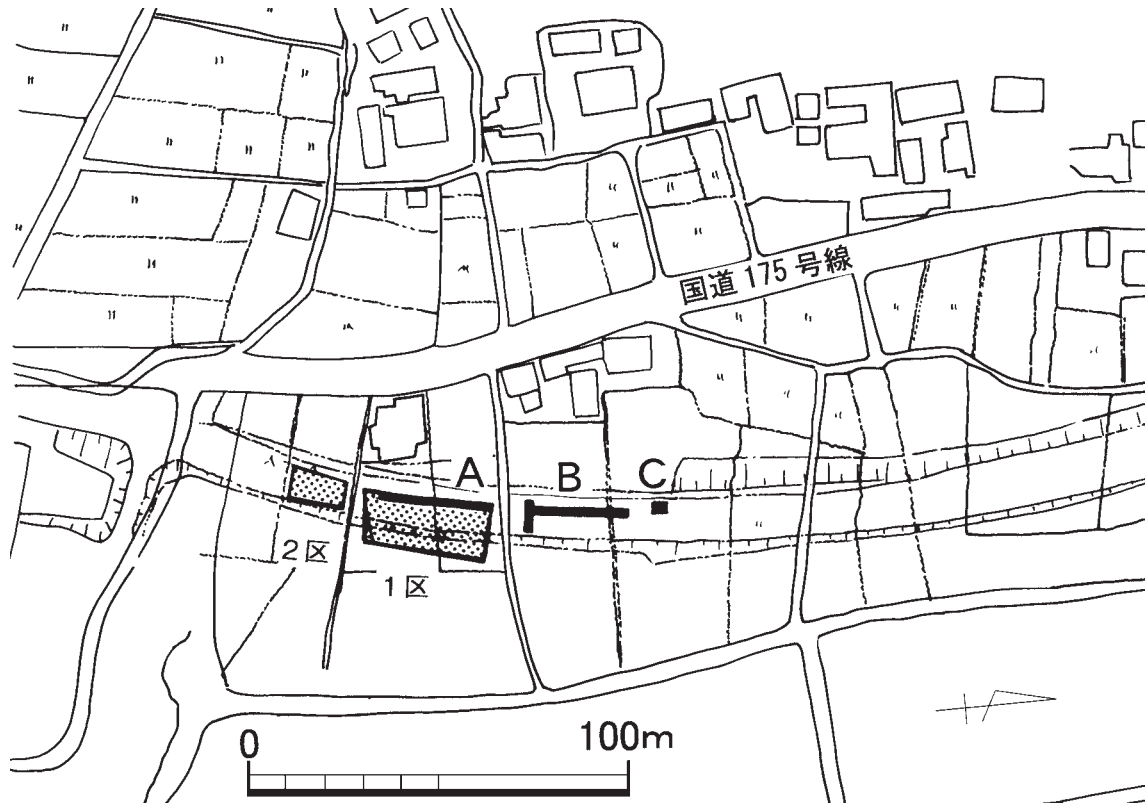
1. はじめに

仲ノ段遺跡は、京都府福知山市大江町北有路地内に所在する。由良川の左岸に位置し、由良川の流れが、南に張り出した丘陵にぶつかり、蛇行して大きく北側に進路を変える低位段丘面にある(第1図)。同遺跡は、京都府遺跡地図によると、土師器・土錘などを出土する中世の集落遺跡とされている。



第1図 調査地および周辺の遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 河守)

- | | | | | |
|---------------|------------|------------|-----------|------------|
| 1. 仲ノ段遺跡 | 2. 五日市遺跡 | 3. 北有路別城跡 | 4. 大安寺遺跡 | 5. 大安寺古墓 |
| 6. 三ヶ村遺跡 | 7. 北有路城跡 | 8. 比丘尼屋敷遺跡 | 9. 赤穂谷口遺跡 | 10. 九郎屋敷遺跡 |
| 11. 三河宮の下遺跡 | 12. 三河古墳 | 13. 石プロ古墳 | 14. 二箇遺跡 | |
| 15. 二箇村城跡 | 16. 南有路城跡 | 17. 引地城跡 | 18. 長橋寺遺跡 | 19. 高川原遺跡 |
| 20. 阿良須神社境内古墳 | 21. 阿良須古墳群 | 22. 阿良須城跡 | 23. 柏谷古墳群 | |
| 24. 上野古墳 | 25. 芝居原遺跡 | 26. 上野遺跡 | 27. 大良古墳 | 28. 阿良須遺跡 |
| 29. 平遺跡 | 30. 仲仙古墳群 | 31. 波美古墳群 | | |



第2図 調査区・トレンチ配置図

仲ノ段遺跡の第1次調査は、由良川の築堤工事に先立ち、京都府教育委員会によって実施された。この調査では中世の遺構・遺物が検出されている。当調査研究センターでは、京都府建設交通部が実施する歩道整備を目的とした一般国道175号交通安全施設等整備事業に伴い、同建設交通部の依頼を受けて、トレンチ調査として平成20年度に第2次調査を実施した。第2次調査の結果を受けて、遺構密度が高い地点を中心に、平成21年度に第3次調査を実施した。

第2次調査は、平成20年11月12日から同年12月19日まで実施した。現地調査は、調査第2課課長補佐兼第3係長石井清司、専門調査員黒坪一樹が担当した。調査面積は合計200㎡である。

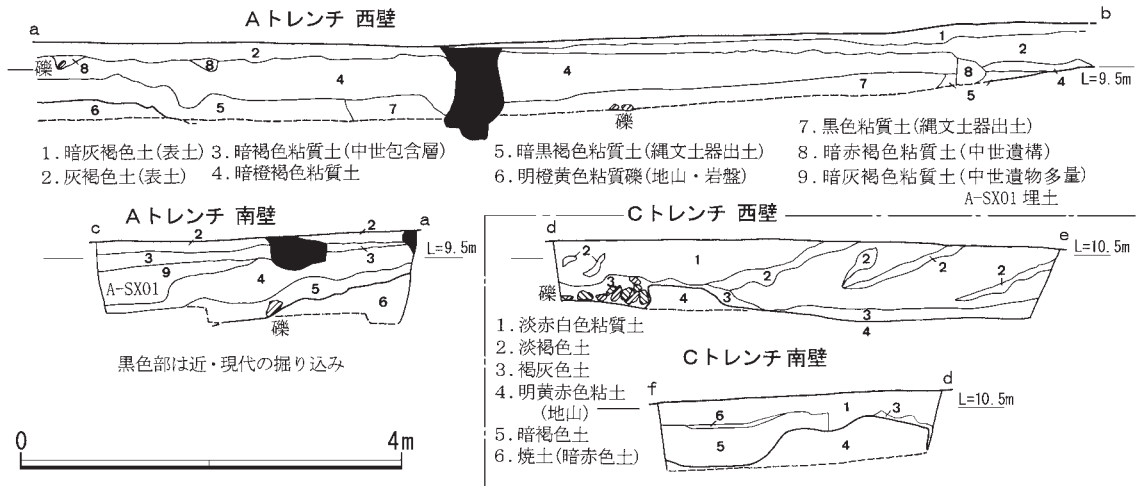
第3次調査は、平成21年6月23日～平成21年8月28日まで実施した。現地調査は、調査第2課課長補佐兼第1係長小池寛、主査調査員柴暁彦が担当した。調査面積は合計500㎡である。調査期間中は京都府教育委員会、福知山市教育委員会、地元有志の方々および調査補助員の協力を得た。記して感謝する。本報告は黒坪・柴が執筆し、文末に文責を記した。

(黒坪一樹・柴 暁彦)

2. 第2次調査

1) 調査経過

調査地は西側の丘陵から河川敷に向かう中間の低位段丘上にあっている。南北に長い調査範囲に、南からAトレンチで90㎡、Bトレンチで95㎡、Cトレンチで15㎡の3トレンチを設定した(第2・4図)。総調査面積は200㎡である。一帯の平均的な標高は10m前後を測る。

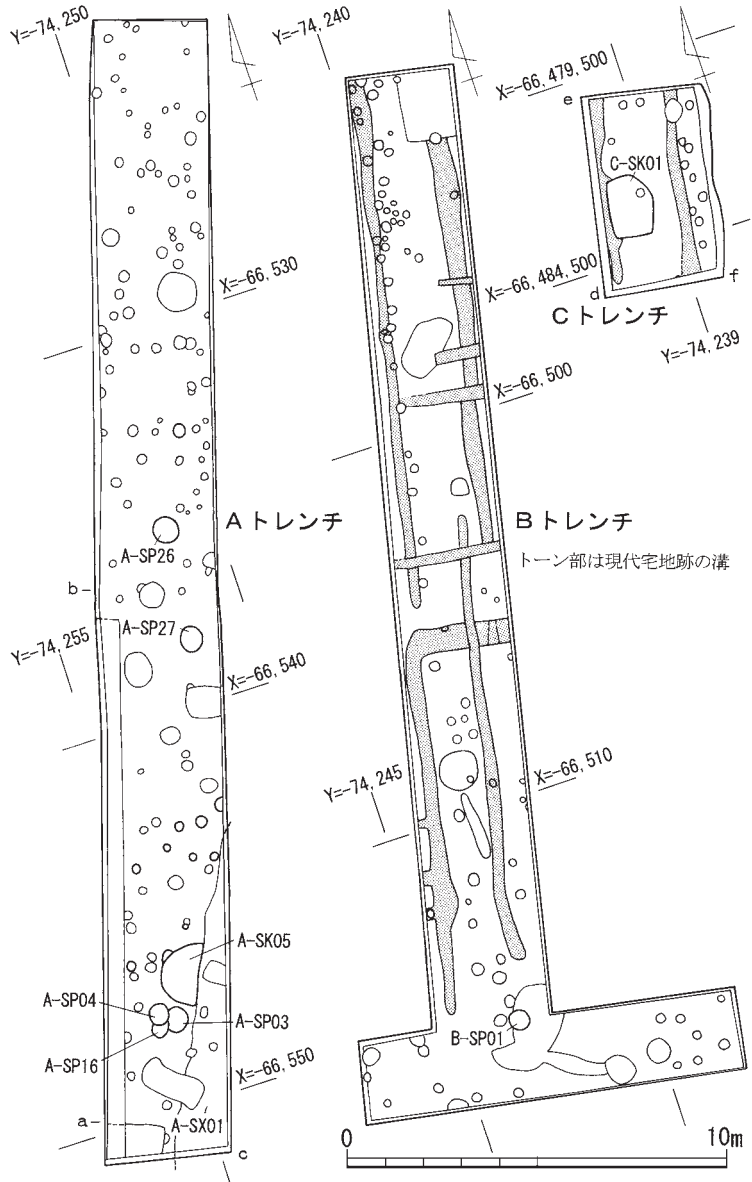


第3図 A・Cトレンチ土層実測図

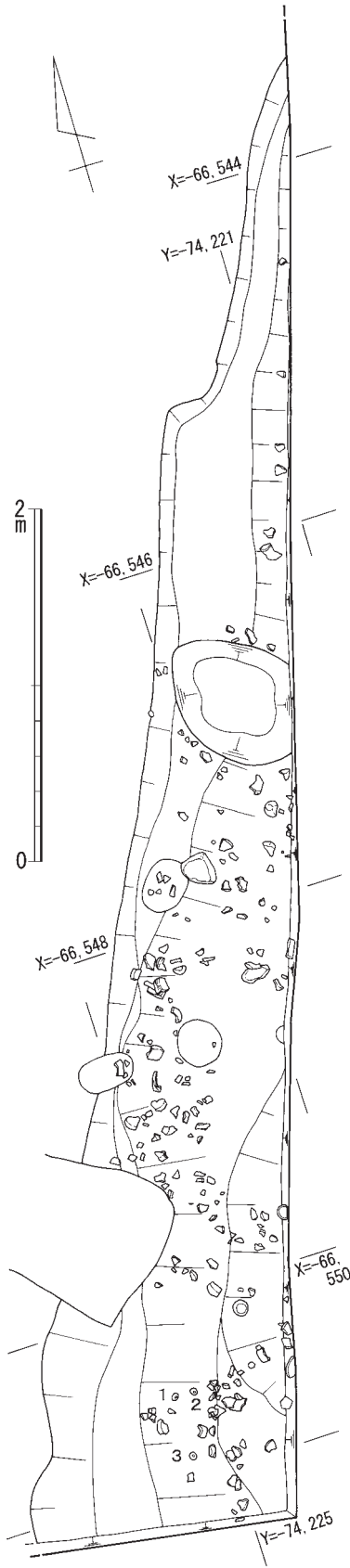
調査の結果、A地区の北半からB地区全体にかけては、厚さ10cm前後の表土直下で硬い地山面となり、検出した土坑から江戸時代の土瓶の破片が出土したが、そのほかは、現代の稲木痕が見つかったのみである。なお、中世以前の遺構面は完全に削平され、残存していなかった。C地区では、Bトレンチからの続きの溝状遺構や土坑が検出され、その上に現代の埋土・盛土である厚い粘質土(第1・4層)や褐色系の堆積土(第2・3・5層)の堆積が認められた(第3図)。

A地区の南側は南西方向に傾斜しており、そこに鎌倉時代の遺構や遺物包含層が認められた。中世の遺構には、土坑、柱穴、東の河川側に向かう落ち込み状遺構A-SX01がある。

2) 層序(第3図)



第4図 A~Cトレンチ遺構平面図



第5図 A-S X01実測図
1～3は銭貨(第7図に対応)

中世以前の包含層のあるA地区南で説明する(第3図)。1・2層は表土である。3層からは土師器などの中世の土器片や橙褐色の焼け土が包含され、北および西にいくほど薄くなる。4層上面で中世および奈良・平安時代の遺構を検出した。4層は奈良・平安時代の遺物包含層で、当期の土器が少量出土した。5層からは中世・奈良・平安時代の遺物はなく、縄文時代の土器が数点出土した。なお、西壁にある7層は、5層同様縄文土器を含んでいたため、遺構として東側の平面で精査したが、斜面上に舌状に堆積した流土のまとまりと判断した。6層は明橙黄色粘質礫の地山となる。

3) 検出遺構(第4・5図)

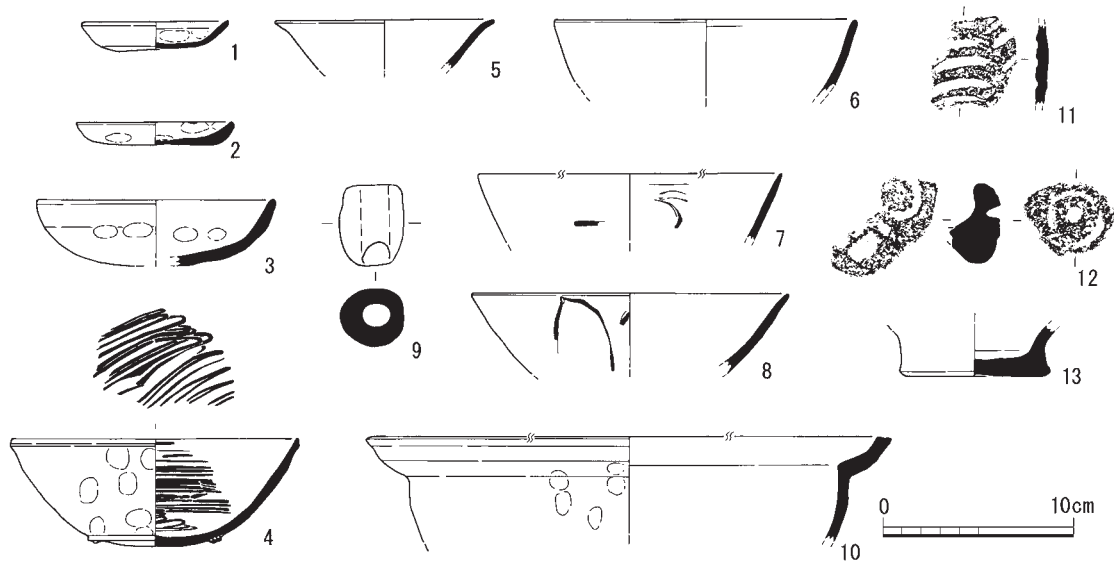
顕著な遺構・遺物がみつかったAトレンチ南半部について報告する。

中世の遺構として、鎌倉時代の落ち込み状遺構A-S X01、柱穴、土坑がある。A-S X01は調査区の南東端にかかり、長さ8.5m、幅1.5m、深さ0.4mの規模を測る(第5図)。埋土は暗灰褐色粘質土で、上層から底面にいたるまで全体的に遺物が出土した。出土遺物には、土師器皿、瓦器椀、白磁・青磁などの輸入陶磁器、須恵器甕、銭貨、土錘などがある。柱穴は土師器や石臼の断片が出土した直径20～30cmを測るA-S P16のほか、A-S P3・4・26・27など数基検出した。

奈良・平安時代の遺構は土坑A-S K05のみで、中世のA-S X01に壊されている。須恵器杯の破片などが出土している。

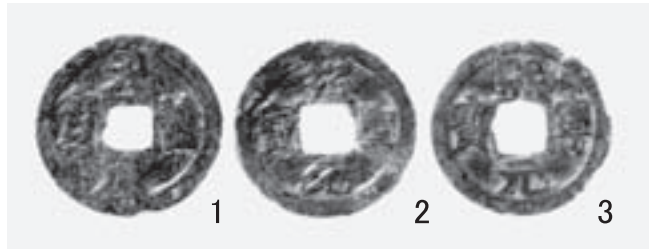
4) 出土遺物(第6・7図)

第6図1～10、第7図銭貨は落ち込み状遺構A-S X01より出土した。1～3は土師器皿である。3がやや古く12世紀代、1・2は13世紀前半とみられる。4は瓦器椀である。内面には丁寧なミガキによる暗文があり、さらに外面も磨かれている。12世紀代の資料である。5は内縁に口ハゲが認められる中国製白磁皿の破片である。6～8は暗オリーブ色をした龍泉窯系の青磁椀の破片である。8は連弁文が表現されている。9は土錘である。粗い成型で大きく穿孔されている。10は瓦質の鍋である。13世紀前半のものであろう。銭貨は3点出土



第6図 出土遺物実測図

した(第7図)。左から天禧通宝(初鑄1057年)、紹聖通宝(初鑄1094年)、熙寧元宝(初鑄1068年)である。



第7図 出土銭貨 実大(番号は第5図に対応)

11~13はAトレンチ西壁の第5層および第7層から出土した縄文土器である。

11は幅広の沈線が施された小破片である。

縄文は施されていない。12は波頂部または把手部分の破片で、刺突痕を中心に沈線が巡る。13はやや上げ底となっている底部である。時期は中期末から後期前半のものであろう。

5)小結

Aトレンチ南半部から、鎌倉時代の落ち込み状遺構(A-SX01)、土坑、柱穴、奈良・平安時代の土坑、縄文時代の土器包含層などが確認された。縄文時代から奈良・平安時代さらに鎌倉時代における遺物が出土したことで、長い期間にわたる人々の営為の跡が考えられる。

ただ調査地点は、仲ノ段遺跡集落の中心部ではなく河川に向かってやや傾斜する外縁部である。今後の調査に注意していかなければならない。工事対象地内においては、遺構・遺物の集中がAトレンチ南半部にみられることから、Aトレンチ南半部を含めた東側と南側に発掘調査の主眼をおくべきであろう。

(黒坪一樹)

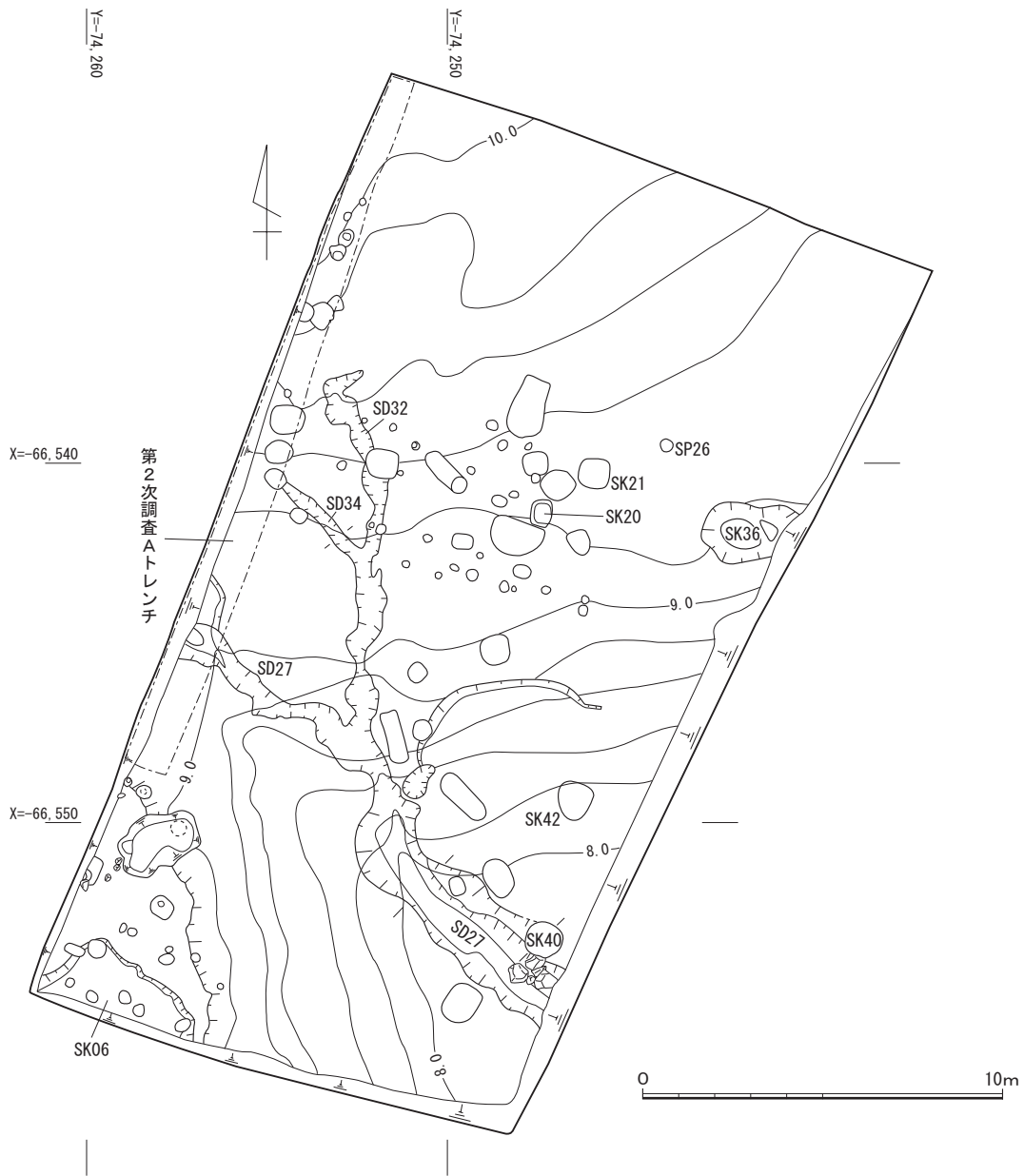
3. 第3次調査

1) 調査経過

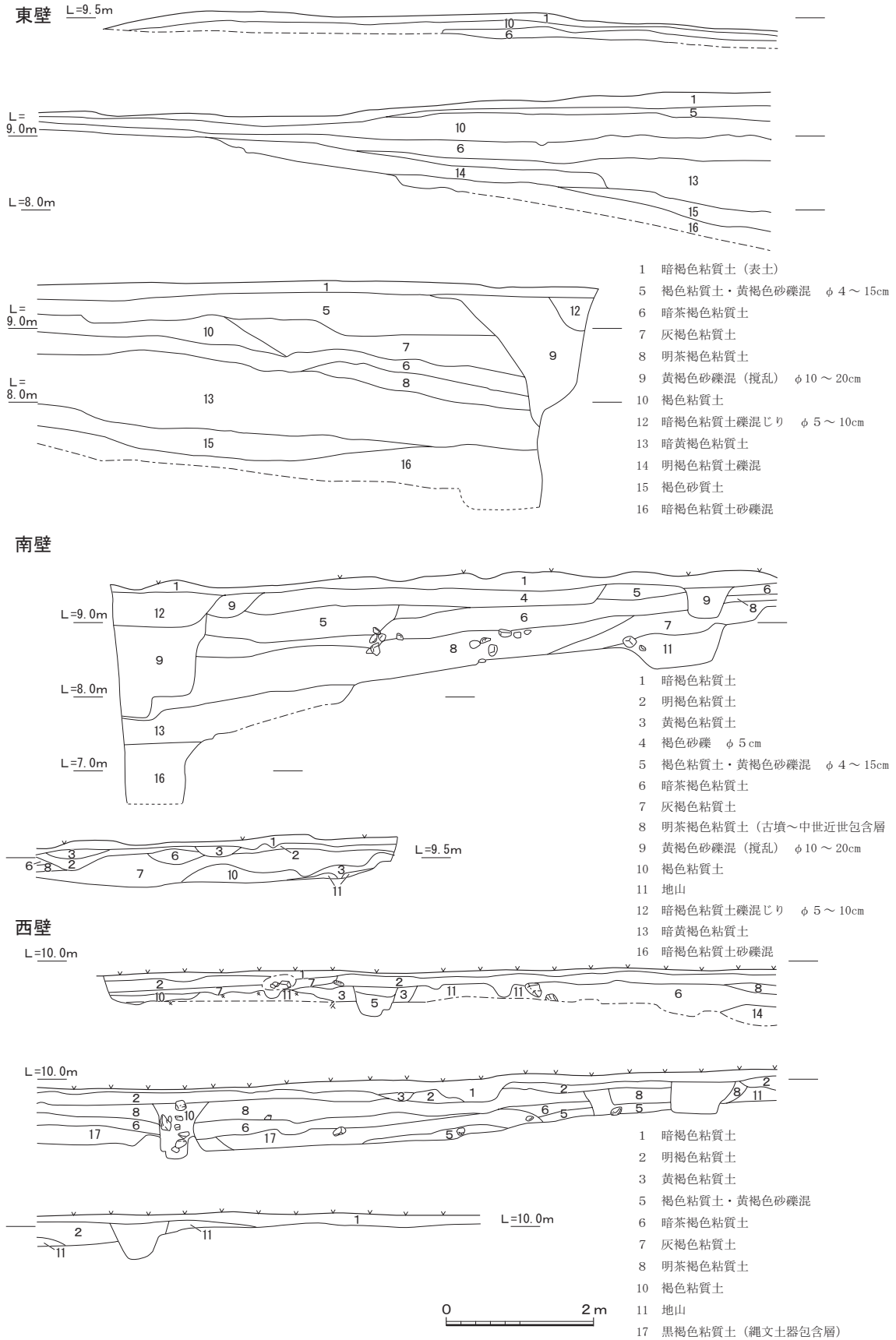
平成20年度の第2次調査のAトレンチ部分を重機により主に西に拡張し、実施した。調査地は現在の里道部分を除外し、調査区を2分して里道の北側を1区、南側を2区とした(第2図)。調査を進めたところ、Aトレンチ周辺は地表下0.2mで礫混じりの地山面に到達したが、東側の由良川寄りについては、丘陵部の張り出し部に、谷地形が埋没していることを確認した(第9図)。

2) 層序

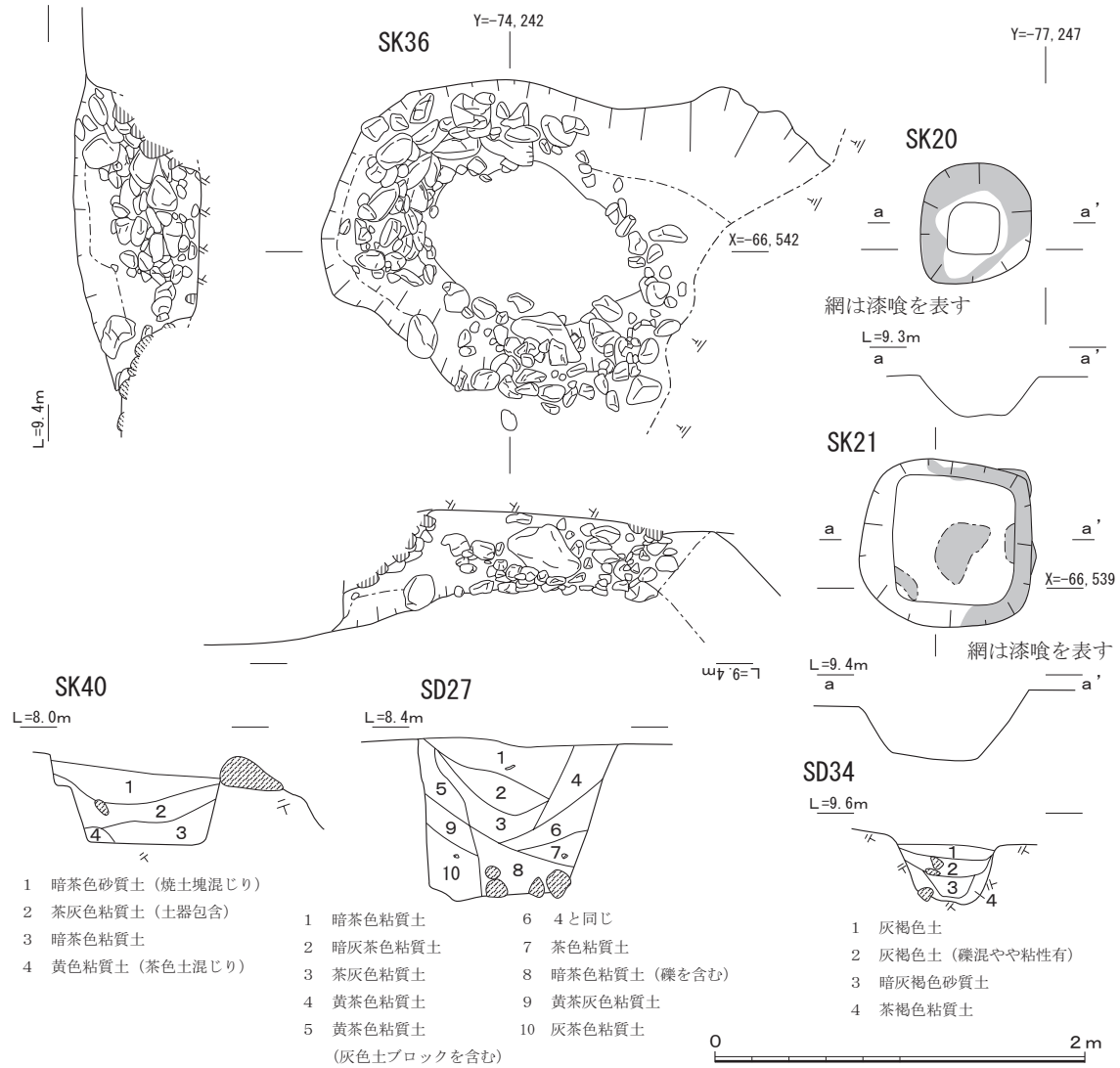
層序は、基本的に1・2区とも共通する。表土および耕作土下は地山の土を盛り土した礫混じりの黄褐色土層(第9図4層、第13図3層)が見られ、その下に暗茶褐色粘質土の遺物包含層(第



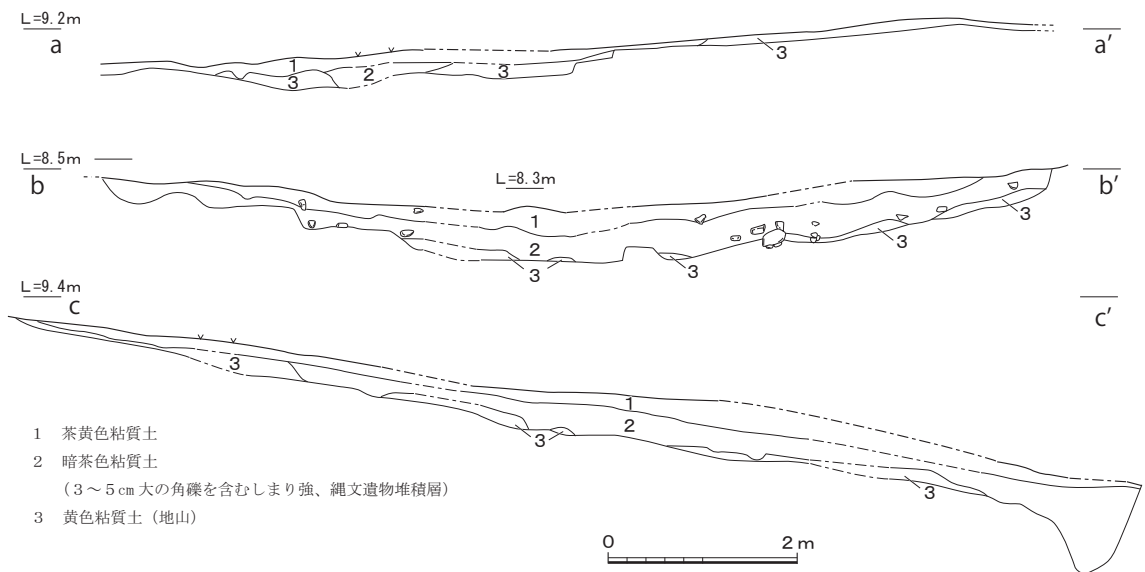
第8図 1区中近世遺構実測図



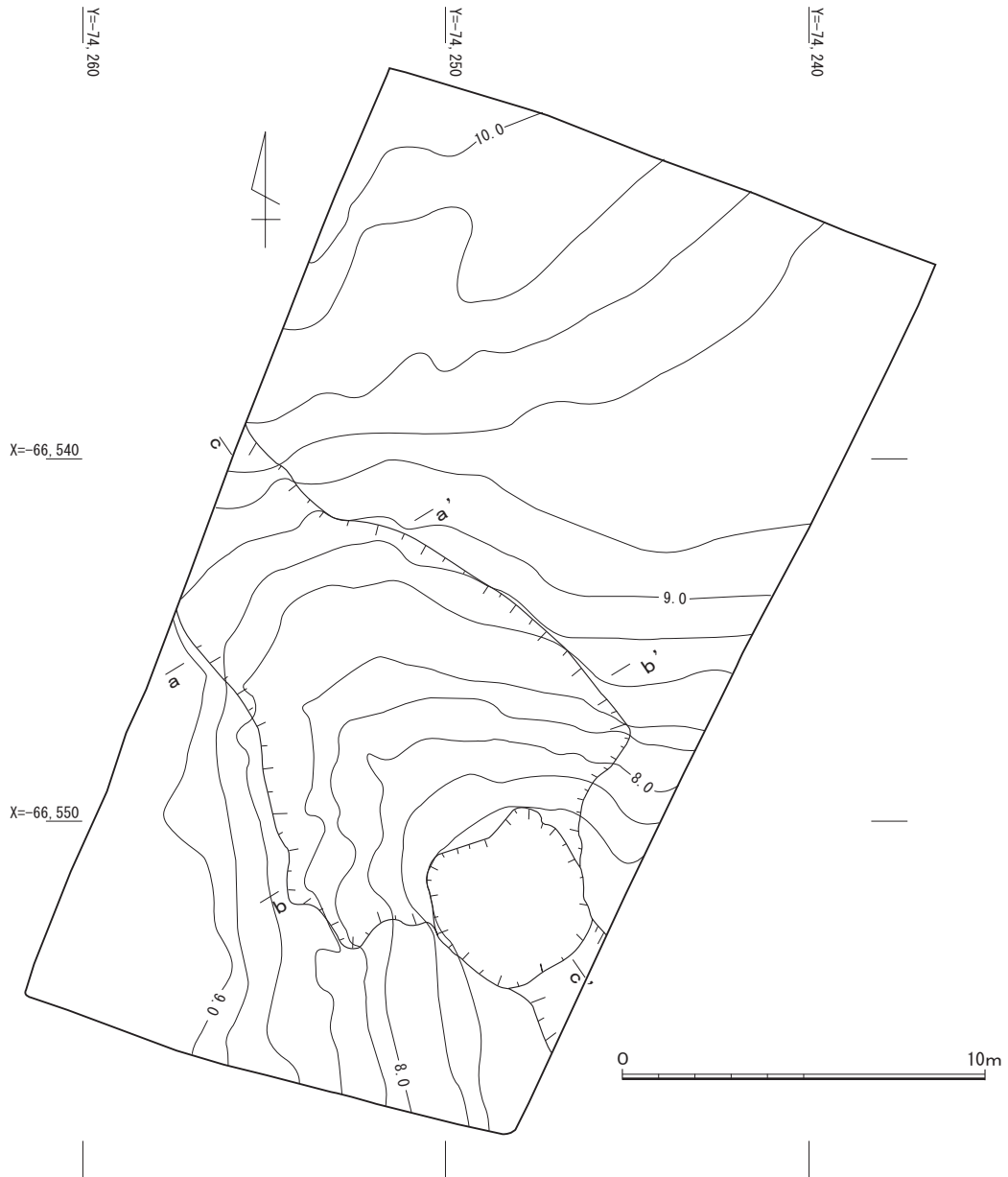
第9図 1区土層実測図



第10図 中近世遺構実測図、溝土層図



第11図 1区下層土層実測図(土層位置は第12図参照)



第12図 1区下層遺構実測図

9図7層、第13図6層)がある。2区および1区の西側(丘陵平坦部)では黄褐色の礫混じりの粘質土の地山となる部分は包含層が薄く、東側を流れる由良川に向かう傾斜に従って厚くなる。土層観察によると、調査で検出した谷地形は近世段階には埋没し、調査前の現地形でみられたような平坦面を形成していたと考えられる。

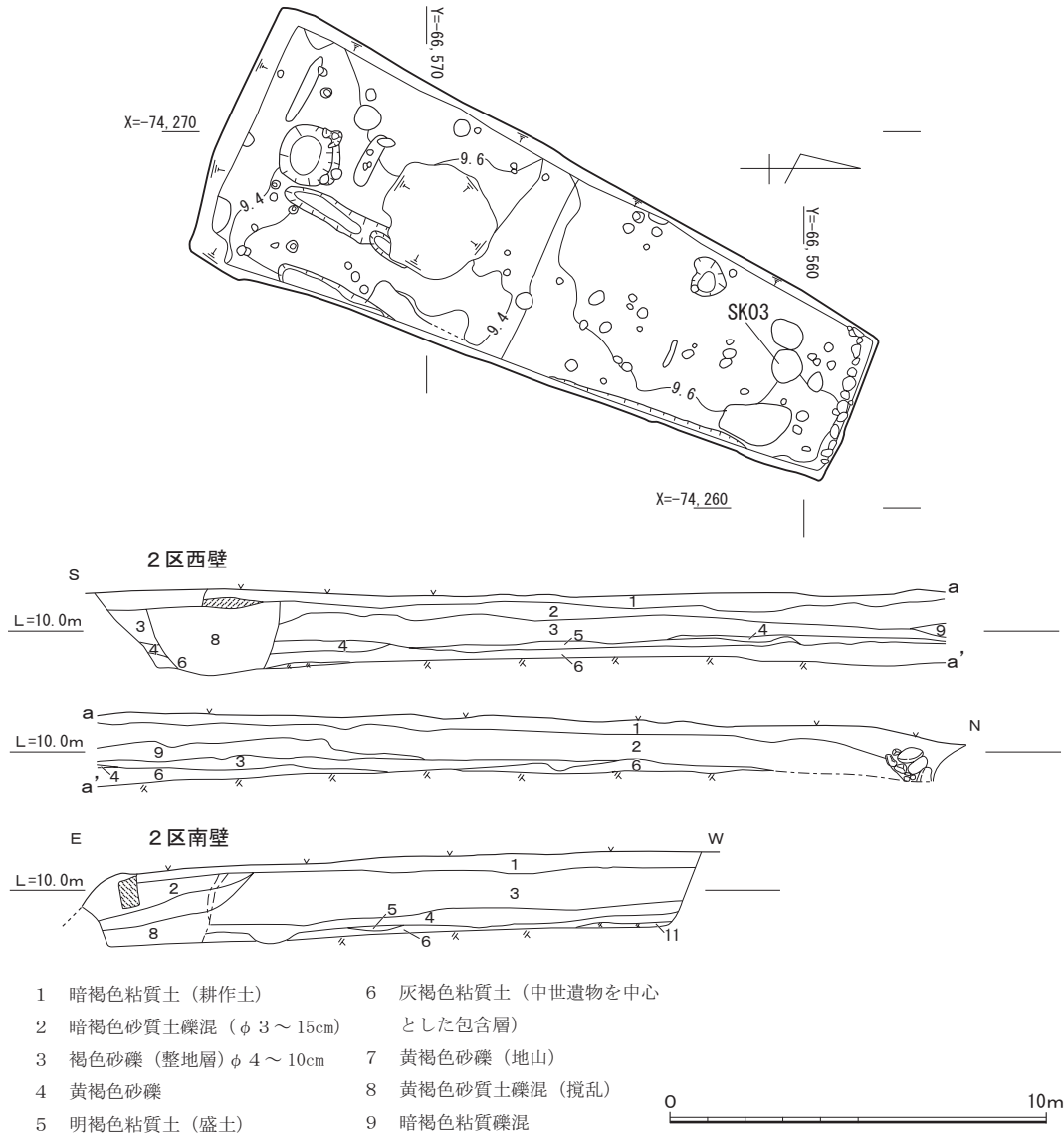
3)検出遺構

(1)1区

①近世の遺構(第8図)

西側の丘陵寄りの地山面で検出した。検出した遺構はピット、土坑がある。

S K 20 土坑内を漆喰で固めた楕円形の土坑である。



第13図 2区遺構・土層実測図

S K 21 平面形が方形をなしており、礫混じりの漆喰で固めていた。

S K 36 土坑の壁周囲を拳大から人頭大の礫を積み上げた貯蔵穴である。東側は攪乱により、基底部の石組が残存していただけであった。石組の下部から肥前磁器の椀が出土した。

②中世の遺構（第8図）

S K 06 浅い土坑で底面は平面をなす。埋土中から瓦器椀の破片が出土した。

S D 27 第2次調査において落ち込み状遺構A-S X01とされており、西側の丘陵から東側の谷に向かって自然流路状に不規則に流れていた。埋土中には古墳時代～奈良・平安時代、中世の土器片とともに銭貨、焼礫、焼土、炭化物や灰が混じっていた。溝の底面を抉って小礫が流れ込み、遺物の小片と混在していた。遺物は層位的に把握できるものではなく、異なった時期の遺物が混在する状況であった。下流部に当たる東側では、一抱えもある数個の角礫が流路の底部付近で見られた。S D 32・34はS D 27と合流するが、遺構の重複関係をみるとS D 27が後から流れ込んでいた。

③縄文時代の包含層 中世の遺構面を重機により除去し、谷部斜面に堆積した黒色粘土を検出した(第11図2層)。堆積土中でもろくなった土器は、取り上げ段階で表裏面が剥落する個体が多数みられた。大半が後期のものであるが、一部前期の土器も出土した。包含層内では、土器のほか石鏃・石錘・磨石や石器の剥片などが出土した。

(2) 2区

表土および耕作土、盛土層を重機により除去した。その後人力により包含層をはずし、礫混じりの地山面で遺構精査を行い、土坑、溝、ピットを検出した。S K03は直径0.6mを測る円形の土坑で、土坑内に人頭大の礫約20石を投棄した状態であった。耕作に伴い不用な礫を集積したものと考えられる。2区で検出した遺構は、出土遺物から、近世の遺構と思われる。

4) 出土遺物

出土遺物には、縄文土器、石器、古墳時代の土器、奈良・平安時代の土器、鎌倉時代の土器、土製品、銭貨、近世陶磁器などがある。

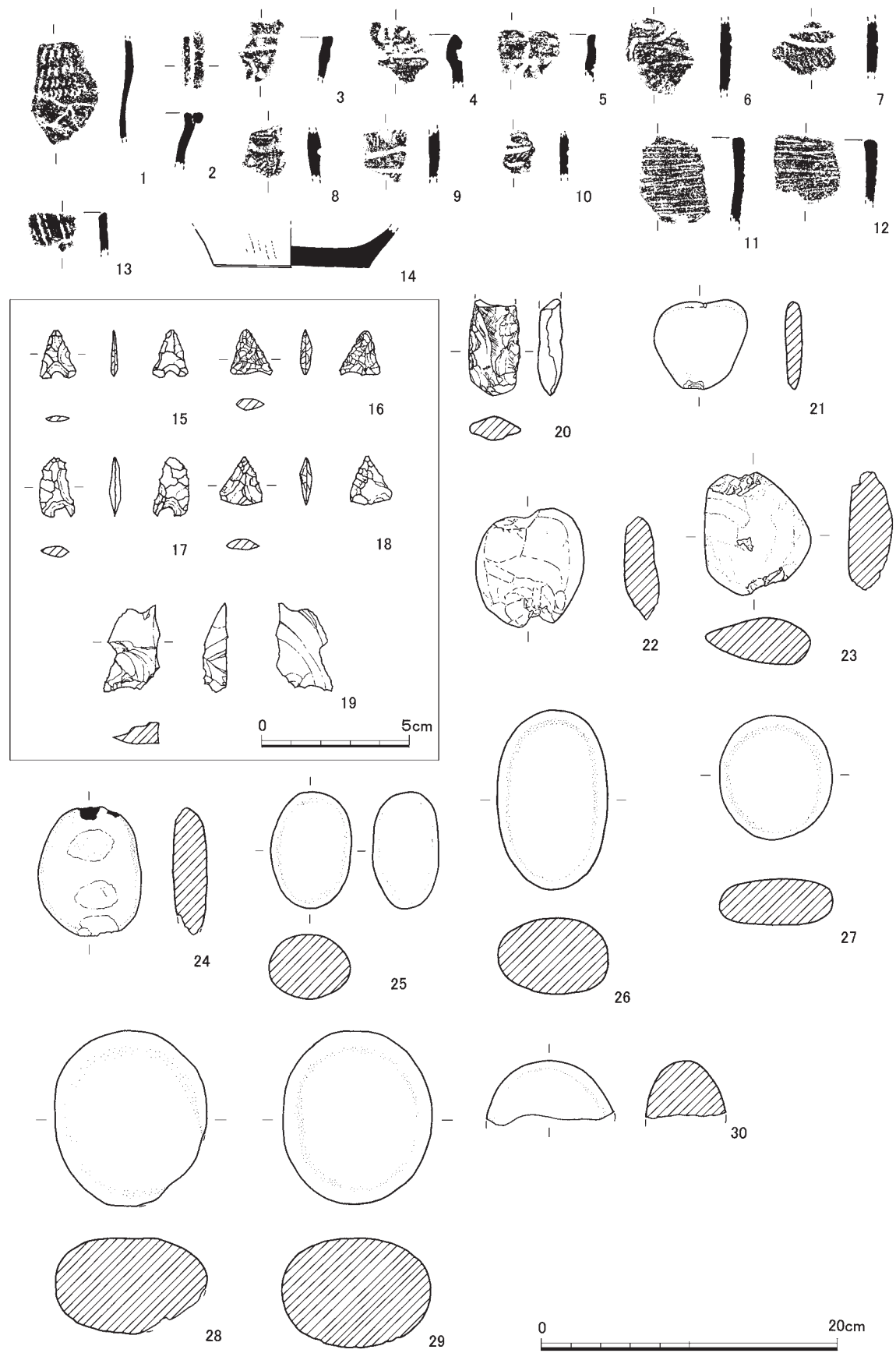
(1) 縄文土器(第14図)

縄文土器には、前期の爪形文土器、中期末の北白川C式に比定される土器、後期前半の中津式土器、条痕文土器、縁帯文土器口縁部片と平底の底部片などがある。

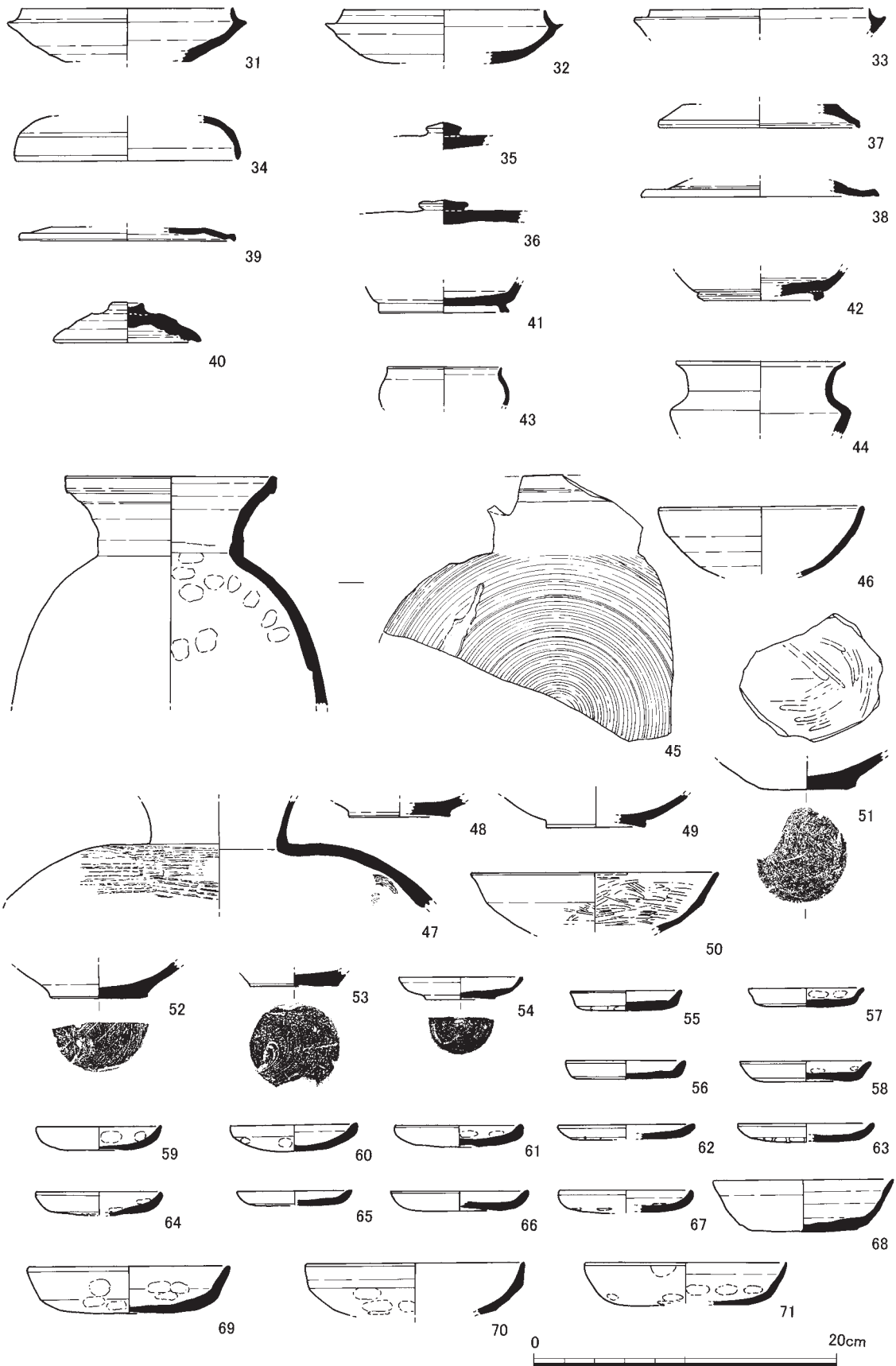
1は爪形文土器である。器壁の厚さは2mmを測る。体部外面に半截竹管状工具の先端部を押圧して「C」字状の文様を施している。2は口縁端部を肥厚させ、沈線を施す、縁帯文土器である。後期初頭のものと考えられる。4は口縁端部にヘラで刻みを施し、口縁部外面に押圧を施している。5～10は磨消縄文土器の体部片である。外面にLRの縄文を施文後、沈線を入れている。6は中津式の土器である。時期は後期前半である。11・12は条痕文土器である。いずれも口縁端部が残存し、横位の条痕の調整である。端部は内面に肥厚している。後期前半のものと考えられる。13は口縁端部が残る撚糸文土器である。14は深鉢の底部である。底部は完存している。色調は内外面とも赤褐色をなし、胎土に砂粒を含んでいる。15～18は石鏃である。15～17は凹基無茎鏃である。18は平基の三角形鏃であるが、未製品の可能性もある。石材は15・17・18がサヌカイト(安山岩)、16は黒曜石である。19は黒曜石の剥片である。サヌカイトは奈良県の二上山の石材を産地とするものと、丹後半島で産出する安山岩がみられる。いずれの石材も剥片が出土しており、集落内で石器製作を行っていた可能性がある。20は打製石斧である。刃部は残存するが、先端部は折損している。21～24は礫石錘である。両端部を打欠き、紐かけ部を作出している。石材は21が砂岩、22は蛇紋岩、23・24は花崗岩質の岩石である。25～30は磨石である。いずれも表面が滑らかになっている。磨石は拳大の河川礫の平石を利用している。

(2) 古墳時代の土器(第15図)

須恵器には、古墳時代後期の杯蓋、提瓶、横瓶、壺、甕などがある。31～33は杯身である。34は杯蓋である。40は蓋で、欠損しているが、内面に返りがある。内面は回転ナデの痕跡を顕著に残す。45は提瓶である。体部上半の一部が残存する。体部には細かいカキ目が施されている。47



第14図 出土遺物実測図(1)



第15図 出土遺物実測図(2)

は横瓶片である。

(3) 奈良時代の土器(第15図)

須恵器杯、杯蓋などがある。35～39は蓋である。35は宝珠つまみ、36は扁平つまみである。41・42は杯B底部片である。43は壺C、44は壺Hである。46は椀である。

(4) 平安時代の土器(第15図)

黒色土器A類が出土している(51～53)。48・49は緑釉陶器である。糸切り痕を底部に有する椀である。釉の発色は淡緑色、黄緑色のものが見られる。48・49は底部片である。このほか、須恵器杯B・杯B蓋および内面に印刻のある土師器皿が出土しているが図示できなかった。

(5) 鎌倉時代の土器(第15～17図)

54～77は土師器皿である。54は削り出し高台底部に糸切り痕をもつ。口径8cm、器高1.5cmを測る。その他の皿は口径が8cm程度、器高1.2cm前後のもの(55～67)、口径が12～13cm前後、器高3cm前後のもの(69～77)がある。いずれも内外面に指頭圧痕が残る。

78～85は瓦器椀である。78は内面に密なヘラミガキが見られる。口径15.7cm、器高5.3cmを測る。高台は外方にやや広がり、断面方形をなす。79は口径15.7cm、器高5.3cmを測る。見込み部分にヘラミガキによる暗文が見られる。高台は断面逆三角形の貼り付け高台である。

86～91は白磁・青磁椀、青白磁皿である。86は白磁椀の口縁部片である。釉調は淡緑灰色である。87・88は白磁皿である。87は印刻による文様が見られる。器壁は0.2cmと薄い。88は見込み部分に花卉状のヘラ描き文様が見られる。89・90は青磁椀である。内面にヘラ描き文様が見られる。91は青白磁皿である。復原口径は11.7cm、器高2.2cm、器壁0.3cmを測る。底部は上げ底状に盛り上がり、見込み部分は印刻による文様が見られる。口縁端部内外面は重ね焼きによる露胎部分がある。

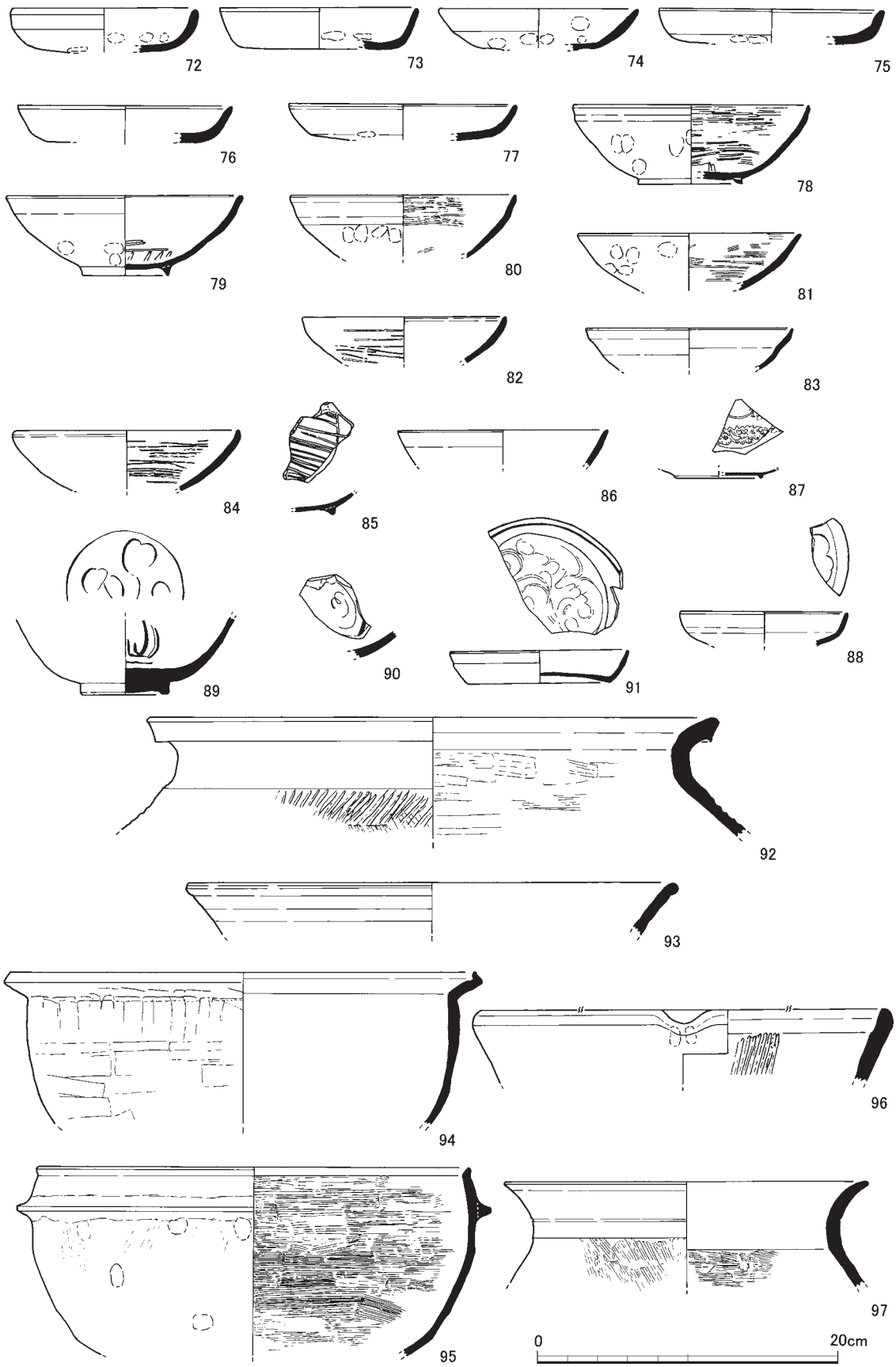
瓦質甕(92)は体部外面に綾杉状のタタキ目を施している。内面はケズリ調整である。東播磨系の土器と思われる。94は瓦質鍋で頸部で外反し、口縁端部を折り返して丸くおさめている。外面の調整は頸部直下を縦位のヘラケズリ、下半部は横位のヘラケズリである。復原口径は31cmを測る。瓦質羽釜(95)は復原口径29.7cmを測る。丸みを帯びる体部に鏝が貼り付けられている。96は瓦質すり鉢である。片口で口縁端部内面に段をもち、それ以下を櫛状工具によりすり目が施されている。土師器甕(97)は丸みを帯びながら外反する頸部に横方向の一条の沈線が巡る。体部外面の調整は斜め方向の板状工具によるハケ目、内面は横方向のハケ調整がある。

(6) その他の遺物(第17図)

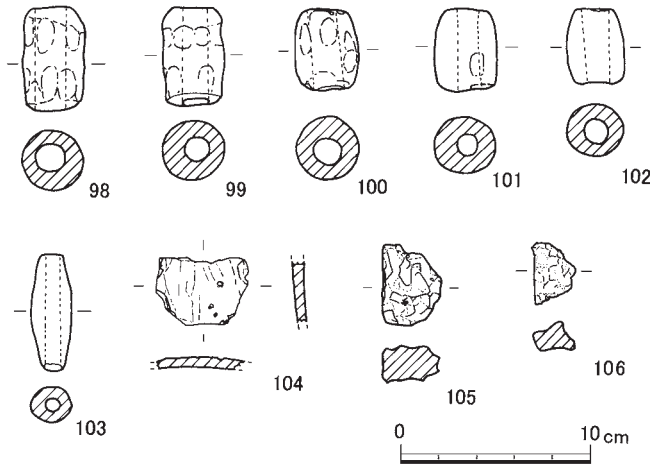
98～103は土錘である。98は長さ5.5cm、99は長さ5.2cm、孔の径1.5cmを測る。直径は98・99ともに3.3cmである。100～102は俵形に成形された土錘である。長さは4.0～4.5cm、直径は3.3cm、孔の径は1.5cmを測る。3cmを超える大型のものが多数を占める。103は長さ6.2cm、最大幅2.3cmを測る紡錘形をなす。紐通し穴は0.8cmである。

銭貨は、天禧通寶(初鑄1017年)、洪武通寶(初鑄1368年)がある。

104は不明銅製品である。断面はやや丸みをもつ。105・106は鍛冶滓である。集落内で小鍛冶



第16図 出土遺物実測図(3)



第17図 出土遺物実測図(4)

を行っていたことが推定される。

このほか、図化していないが、肥前磁器がS K36から出土した。網目文が施されている。

5)小結

今回の調査では、集落に伴う遺構は検出できなかったが、集落内で廃棄されたと思われる遺物が谷部から出土した。集落本体は丘陵裾部の平坦面にあることは間違いない。

予想できる集落には、出土した緑釉陶器や白磁・青白磁からみて、官衙的施設の要素もみられるが、由良川に近いという遺跡の立地から、由良川の水運を利用した物資の集積地および中継地点としての機能をもった集落の可能性も考えられる。

縄文時代は、土器や石器、石器製作に伴う剥片が出土していることから、西側の丘陵から続く平坦面に集落が存在するものと思われる。集落の立地は、遺跡より1.5kmほど由良川下流の左岸に位置する三河宮の下遺跡と同様である。

(柴 暁彦)

4. まとめ

仲ノ段遺跡第2・3次調査の結果、縄文時代前期・中期・後期の土器や石器、古墳時代後期の須恵器、奈良・平安時代の須恵器、土師器、黒色土器などの遺物が出土し、中世の土坑・溝、近世の土坑などの遺構が検出された。もっとも量的に多い中世における仲ノ段遺跡の性格は、3次調査の小結でもふれたように、由良川の水運を利用した物資の集積地点であった可能性がある。今後の調査により中世をはじめとする仲ノ段集落の範囲や内実が次第に明らかとなることを期待したい。

(黒坪一樹)

調査参加者(敬称略) 調査補助員：奥田栄吉、真下春美、小島健之介
整理員：丸谷はま子

参考文献

- 八瀬正雄「I 土遺跡(第3、4次)」(『福知山市文化財調査報告書』第54集 福知山市教育委員会) 2007
八瀬正雄「I 土遺跡」(『福知山市文化財調査報告書』第56集 福知山市教育委員会) 2008

圖 版



(1) 調査地の状況(北東から)



(2) 調査地の状況(南東から)



(1) 第2次Bトレンチ全景完掘状況
(南から)



(2) 第2次Cトレンチ全景完掘状況
(南から)



(3) 第2次Aトレンチ南半部完掘状況
(南から)



(1) 第2次AトレンチS X01内出土
土器(東から)



(2) 第2次AトレンチS X01内出土
銭貨など(東から)



(3) 第2次Aトレンチ南壁断面
(北から)



(1) 第3次調査前の状況(北西から)



(2) 第3次調査前の状況(北東から)



(3) 第3次1区設定状況(南西から)



(1) 第3次溝S D27完掘状況
(北西から)



(2) 第3次溝S D27完掘状況
(南東から)



(3) 第3次溝S D27堆積状況
(南東から)



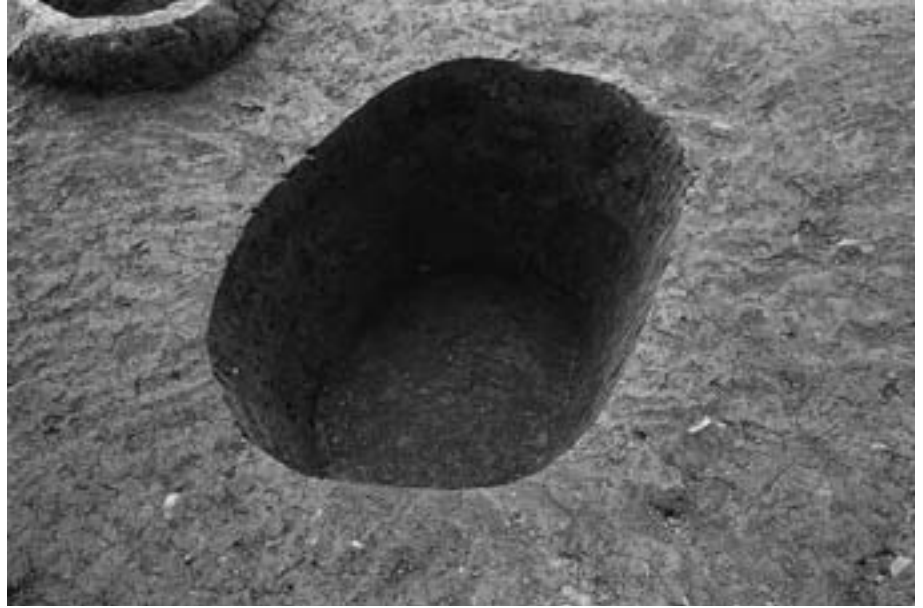
(1) 第3次土坑S K 42堆積状況
(東から)



(2) 第3次土坑S K 42完掘状況
(南西から)



(3) 第3次土坑S K 29堆積状況
(北東から)



(1) 第3次土坑 S K 29完掘状況
(南東から)



(2) 第3次土坑 S K 40堆積状況
(北西から)



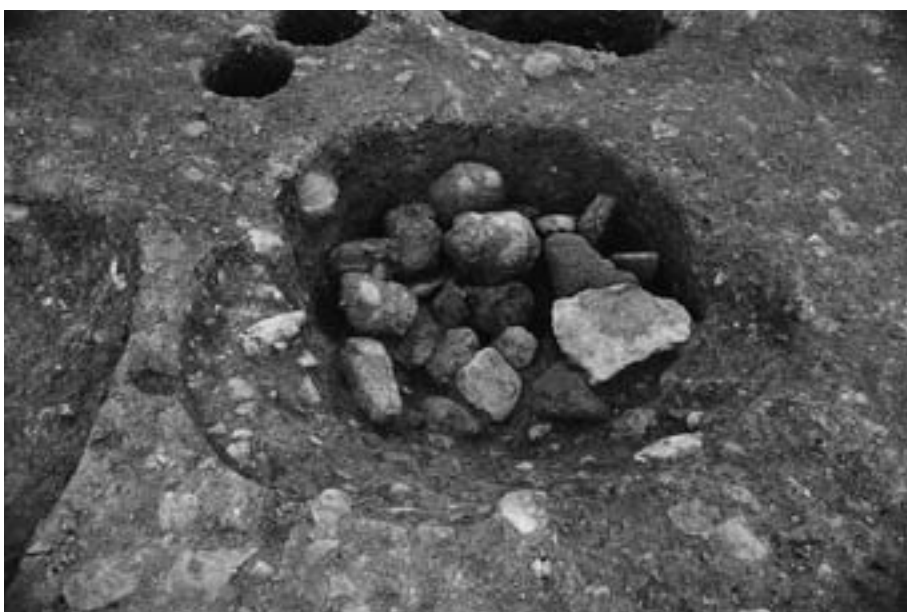
(3) 第3次土坑 S K 36完掘状況
(南東から)



(1) 第3次土坑S K36完掘状況
(東から)



(2) 第3次2区全景(北西から)



(3) 第3次2区土坑S K03礫廃棄状
況(南から)



(1) 第3次2区全景(北西から)



(2) 第3次2区全景(南西から)



(3) 第3次1区下層調査状況(北西から)



(1) 第3次作業状況(南西から)



(2) 第3次下層谷部堆積状況
(南東から)



(3) 第3次谷部堆積状況近景
(東から)



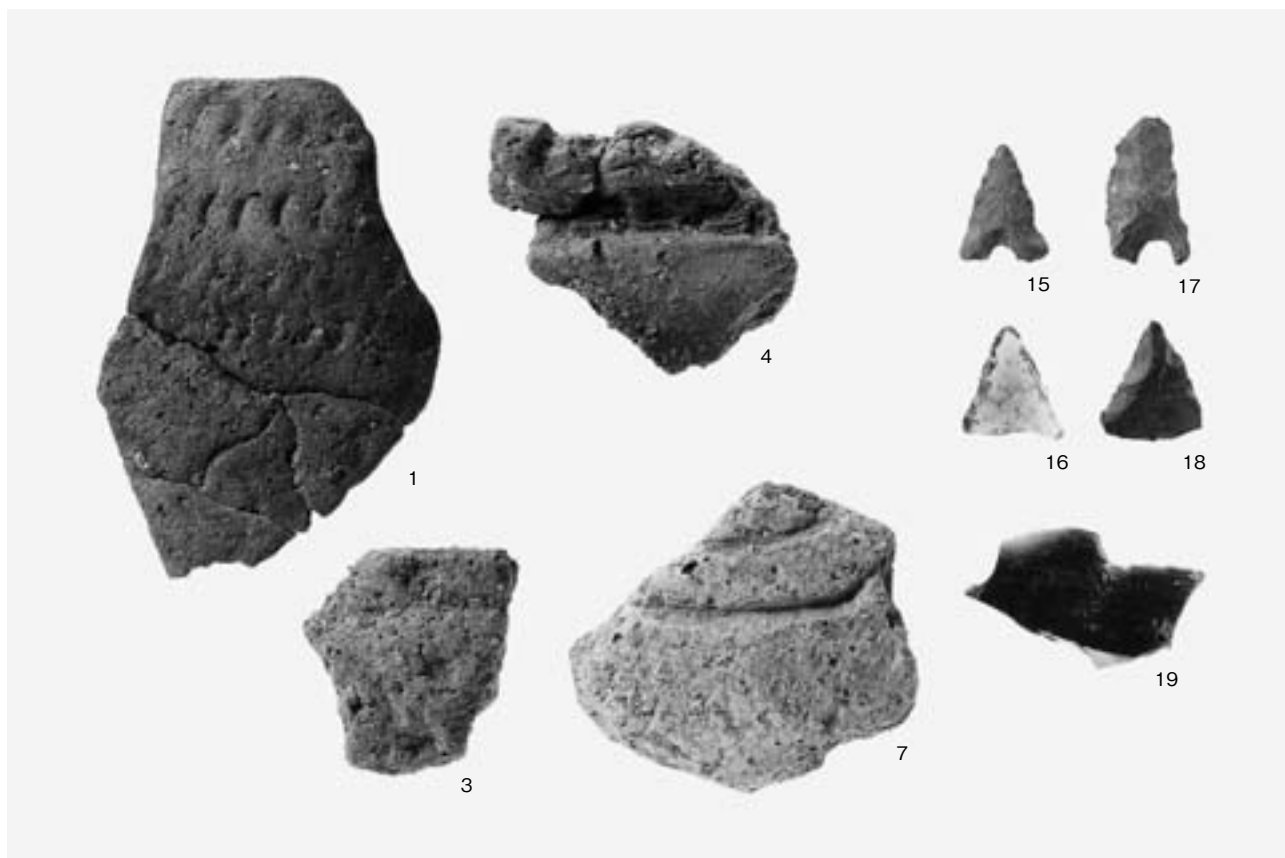
(1) 第3次1区下層谷部堆積状況
(北西から)



(2) 第3次1区下層谷部堆積状況
(南西から)



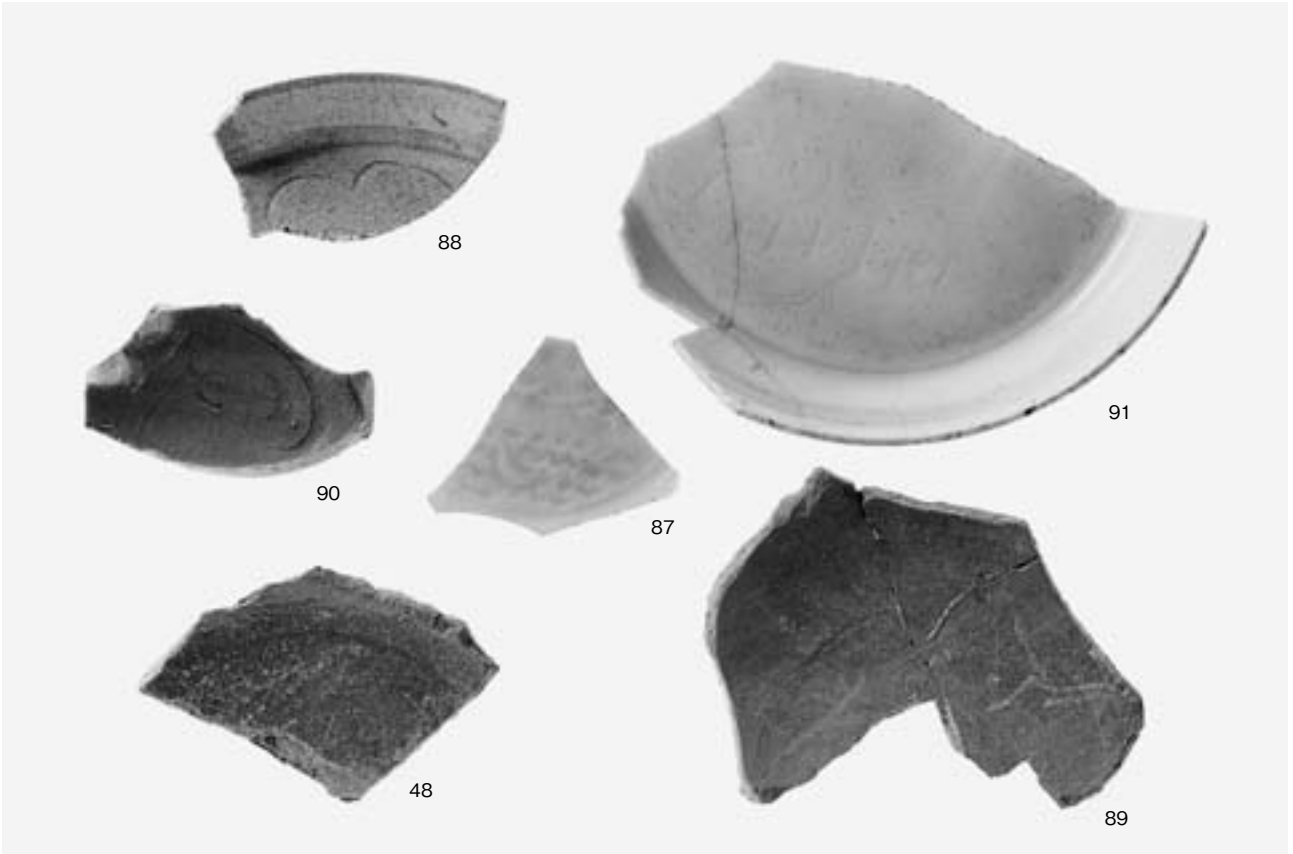
(3) 第3次磨石出土状況(南西から)



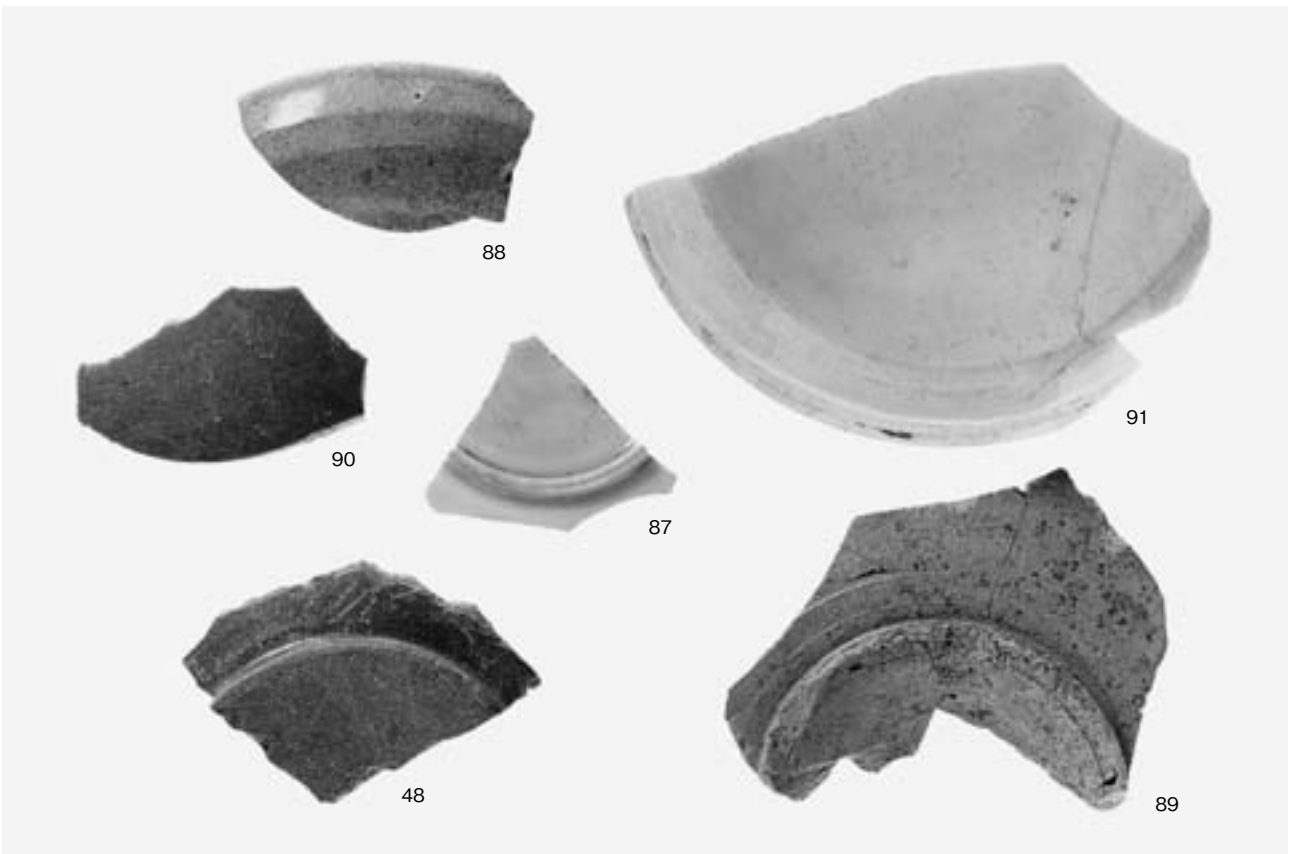
(1) 第3次出土遺物1 (番号は実測図に対応する)



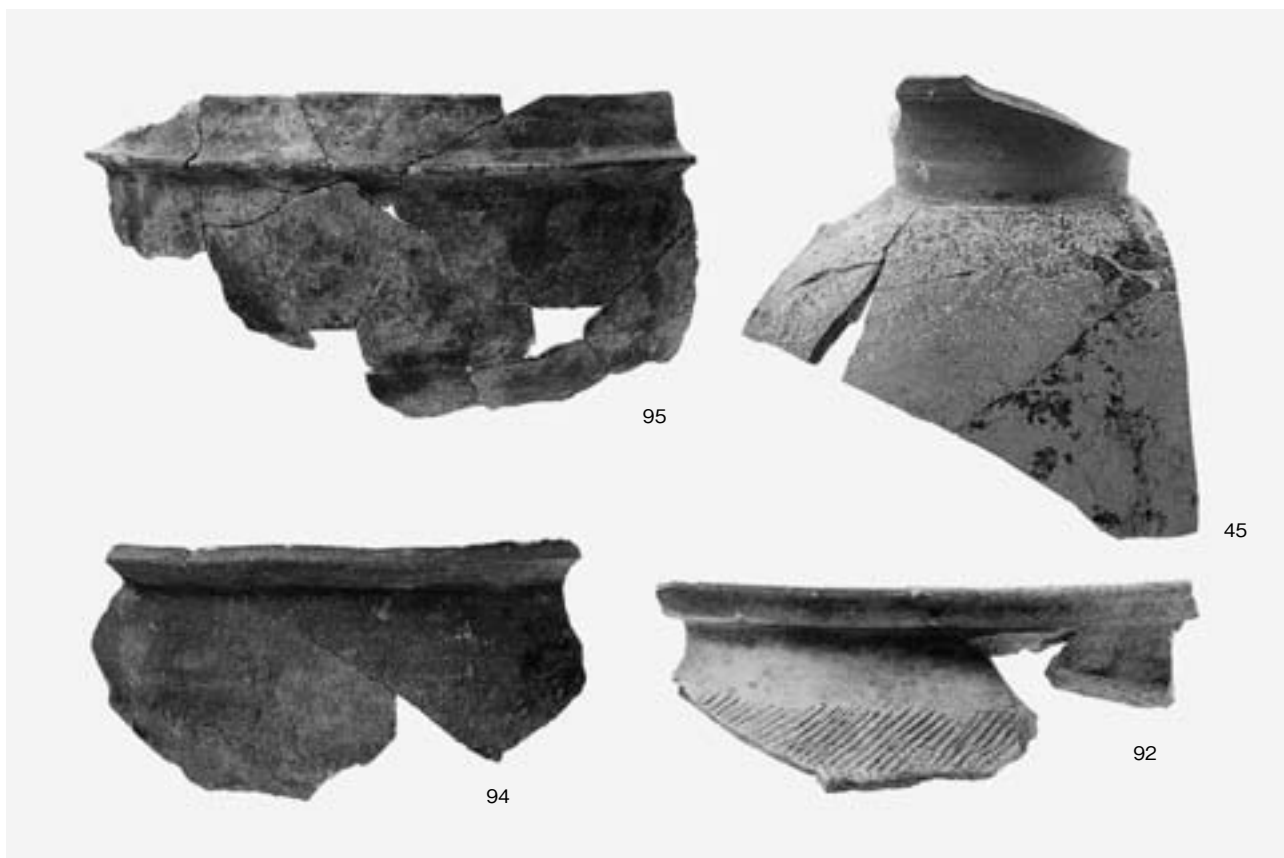
(2) 第3次出土遺物2 (番号は実測図に対応する)



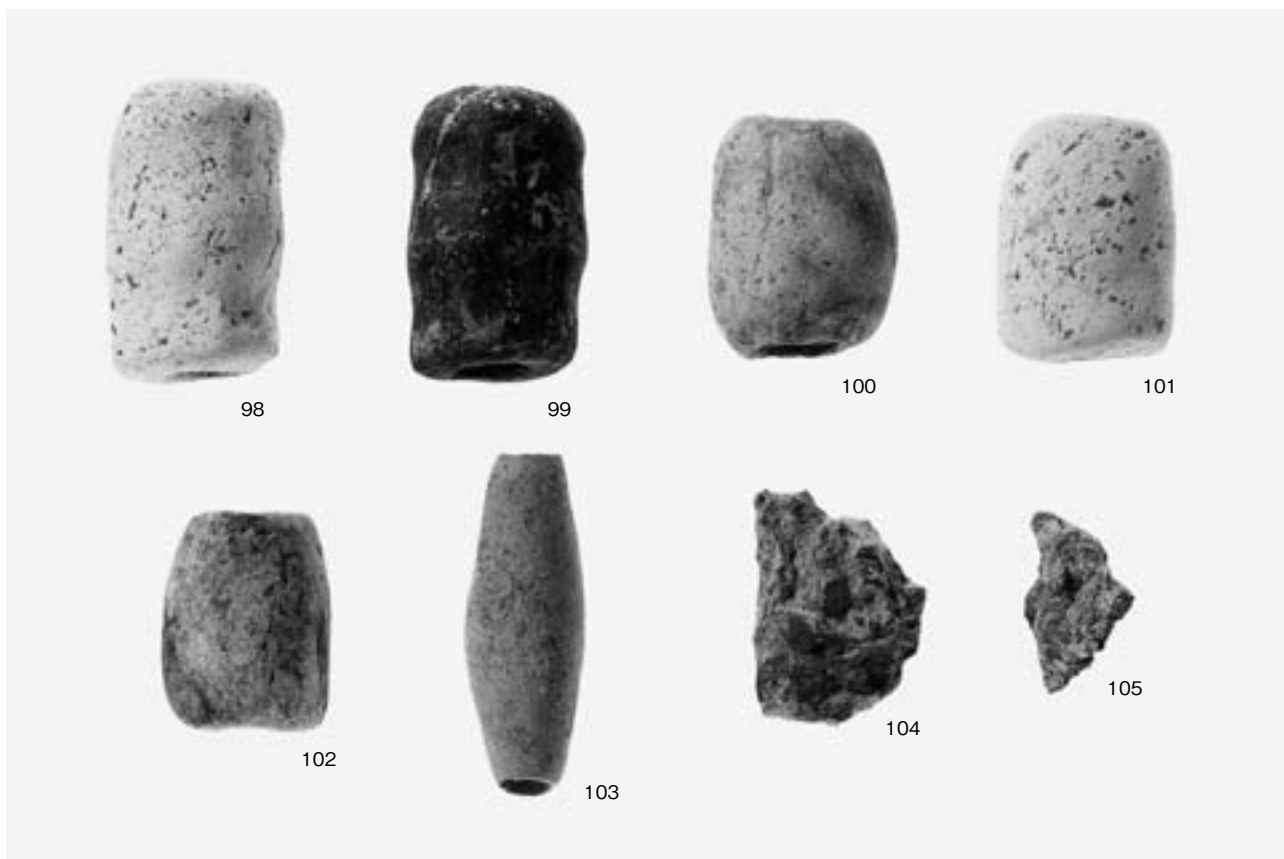
(1) 第3次出土遺物3 (番号は実測図に対応する)



(2) 第3次出土遺物4 (番号は実測図に対応する)



(1) 第3次出土遺物5 (番号は実測図に対応する)



(2) 第3次出土遺物6 (番号は実測図に対応する)

京都府遺跡調査報告集 第 140 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141